

情報覇権と帝国日本Ⅰ・Ⅱ

海底ケーブルと通信社の誕生／通信技術の拡大と通信戦

本書は一言で表すと、近代化していく過程で「通
「大日本帝国の西欧情報 信技術」という軸、その拡
覇権への挑戦と挫折」Ⅰ、大々情報覇権への道筋を三
三四一頁を詳細に論述し、寧ろ描いている。従来でも
た書である。著者がこれま 少なかつた通信社・史に關
でとってきた手法に忠実に する研究書で十分とらえき
基つき、第一次資料を渉獵 れていなかつた部分が多面
して、日本が世界を相手に 的に詳述されている。

衛星放送や光ファイバー
の開發で、IT(情報技術)
社会は、二〇〇〇期末からイ
ンターネット、サイバース
ペース上の個人レベルでの
情報送受が容易となり、そ
れらを背景にグローバルゼ
ーションが進んだと言え
る。マス・メディアから「マ
ス」がとれたメディアが市
民(権)を権に動くように
なった。それに伴い、民主
化の動きやネット世論が国
際社会のなかで強い影響力
をもたらしつつあるのよう
に見える。

一般的に、コミュニケー
ションとはもともと個人間
に始まり、それを送受する
機器(媒体、メディア)が
発明され、メッセージを流
通する経路の確保があつて
こそ成立する。従って、特
定、不特定にかかわらず、
人々の間に情報が流通する
というプロセスは普遍的な
ものであるから、当然そこ
に人類の歴史がある。

本書は一九世紀に遡り、
陸上、海底電信という技術
が世界を結ぶ過程で、日本
のメディアが取り組む生き
様と、国民国家として成長
する日本の外交政策、情報
の発信経路の拡張、この絡
み合いを描いている。全二
書のうち一巻の副題「海底
ケーブルと通信社の誕生」
が物語るように、通信社の
成長史とも見える。
時は十九世紀半ばから始

まる。海外ニュースの伝播
は開国前後から始まっては
たが、海底電線の日本への
上陸を機に世界の趨勢に巻
き込まれる(一巻 第一部
海底電線と通信社の誕生)。
続いて国際舞台へ飛躍する
ための国際ニュースの活用
に目覚めた日本はニュース
の収集、配信を業務とする
通信社という組織の存在を
重視する策に打って出る

「通信技術」拡大への道筋を描く
これまでとらえきれなかつた部分を多面的に詳述
鈴木 雄 雅

ルの敷設から世界を一周す
る海底電信の開設が、実は
植民地を脱して連邦結成と
向かうオーストラリアにと
つて新たなニュースの植民
地に陥れたと指摘したこと
がある(オール・レッド・
ルート)ライン、筆者「オ
ーストラリアにおける電信
の発達と通信社の成長」荒
瀬・高木・春原(編)『自
由・歴史・メディア』日本
評論社、一九八八年)。日
本もその例外にはなること
はなかつた。

こうした過程において、
注意すべき点は日清、日露
の戦争が自前の国策通信社
をもち、国際報道の自主権
を確立しなければならぬ
という考えが生まれるター
ニングポイントになったこ
とである。日本が西欧の背
中を追いながら、後発の帝
国主義路線を歩み始めたか
らである。メディアと国家
の利益(共通する目的)日
本の真の姿を世界に示す
が見事に一致する道に入り
込む。

第一次世界大戦と宣伝戦
を経験した世界は、悪質な
情報・文化の国境を超えた
流入に対する規制を訴えつ
つも(一九二四年、良質
な情報・文化は促進する
(一九三二年)というよう
に軟化した。が、それまで
の出版物や映画という枠組
みから、無線通信の登場は
新秩序構築を目指す者にと
つて、新たな戦略・戦術(宣
伝戦および対外情報戦)を
開発し、彼らに拍車をかけ
る引き金ともなったのであ
る。それを携えて、日本は
東アジアでの新秩序(欧米
列強が構築した既存体制を
壊す)構築を目指すことに

なる(二巻 第四部国際情
報秩序の地殻変動)。
実際に東アジアで覇権を
握っていたのは英・ロイヤ
ル通信社であり、国際ニ
ュースの受信、発信は英国メ
ディアのコントロール下に
あったと言つても過言では
ない。そこへ米・APが食
したのもまた事実である。
一九世紀後半まで「欧州の
メディアは新大陸の事実を
正しく報じていない」こと
に悩まされたままに始
まったのである(第四部第
八章)。

ところが、現実には国家
の崩壊とともに日本の東ア
シア情報覇権構想は消え去
る(第五部)。
国家の形成、支配、拡大
はいかに情報をコントロ
ールするか、否かによる
とは、古くて新しい言説で
はないか。知恵を持つもの
が新たな文明の利器を使っ
て、さらなる拡張と支配を
繰り返すことは、紛れもな
く今後も続く。本書は陸上
から海底に入り、空を舞う
ところまでだが、こんにち
宇宙空間にまで及ぶコミュ
ニケーション技術の発展
は、その都度対立する舞台
で自己の正当化を達成させ
るための武器として重要な
役割を担っている。
われわれは何時になつた
らその愚かさ気づき、乗
り越えることができるのだ
ろうか。(すずき・ゆうが氏
||上智大学教授・新聞学専
攻)



四六判・I 502頁 II 652頁
各4935円・吉川弘文館
I 978-4-642-03823-2
II 978-4-642-03824-9

証書人
14/3/28
No 3033
(P.7)

★ありやま・てるお氏は
東京経済大学教授。東京
大学大学院博士課程単位
取得退学。一九四三年生。